翻訳行為における〈共同／協働〉の問題

- フランス語版『或る女（前篇）』をめぐって -

杉淵　洋一

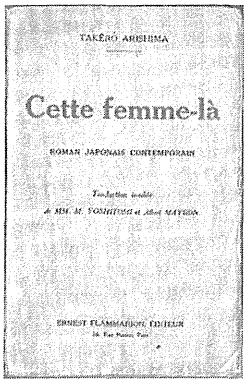
要旨

１９２６年、有島武郎『或る女』の前篇部分が、駐仏外交官の好富正臣と駐日経験のあるアジア研究家アルベール・メーボンの手によって翻訳され、パリの書肆アーネスト・フラマリオン社より上梓されている。本論では、日本における唯一の文学の師として有島を慕っていた芹澤光治良の回想文などを手掛かりに、この翻訳本が出版された背景、翻訳をめぐる人物達の日本ーフランス間における交流を炙り出し、当時の日本語の小説がフランス語に翻訳されていく一過程を、翻訳テクストを作り出していく共同（協働）体というものを念頭に置きながら明らかにすることを狙った。また、その点から、有島武郎が日本文学の変遷において担った役割を再考するとともに、有島武郎の文学作品がフランスに発信されることによって、一部のフランスの知識人階級にインパクトを与えたであろう可能性を、フランス語に訳されたテクストと原書とを比較することによって提起した。

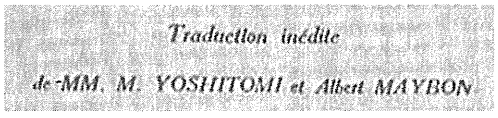
はじめに

人気作家・有島武郎の婦人公論記者・波多野秋子との衝撃的な情死の三周年にあたる１９２６年、有島の実弟・生馬が『有島武郎遺稿　愛する人々へ』[1]の刊行に際して、「三周年にあたつて」の出版と前置きしながら、有島の雅号にちなんだ『泉谷遺墨集』[2]、井東憲『有島武郎の芸術と生涯』の書誌名とともに、日本文学の金字塔の一つとして燦然と輝き続ける有島の長編小説『或る女』の前編部分がフランス語に翻訳され、著者 Arishima Takerô（アリシマ・タケロー）、翻訳者 Yoshitomi Masaomi（好富正臣）、共同翻訳者 Albert Maybon（アルベール・メーボン）の名義で、パリのアーネスト・フラマリオン出版社より、仏題 *Cette femme-là*（セット・ファム・ラ）として上梓されたことについて言及している。

図１．フランス語版『或る女（前編）・仏題：*Cette femme-là*』の表紙



※著作者名が「アリシマ・タケオ」ではなく「アリシマ・タケロー」となっている。



※「好富（正臣）氏とアルベール・メーボン氏による初翻訳」とある。

※最下部に「アーネスト・フラマリオン出版社ーパリ市ラシーヌ通り２６番地」とある。

１９２５年にパリ高等社会学院を卒業し、仏文雑誌 *REVUE FRANCO-NIPPONNE*（『日仏評論』）を創刊していた、のちに読売新聞の副主筆に就任する松尾邦之助は当時のパリジャン達の日本文学への無関心さを、市販の『世界文学辞典』やソルボンヌ大学のミシェル・ルボン教授が執筆した『日本文学アントロヂ』における日本文学への言及の少なさを指摘しながら、「巴里大書店の一つ『ストック』には、キヤビネ・コスモポリットと云ふ世界文学文庫があつたが、ここにも日本は完全に除外され、印度や支那文学の翻訳はあつても、日本が全く忘れられてゐた。」[3]としている。

この松尾の手によって川端康成、芥川龍之介、樋口一葉の作品数点がフランス側からの依頼によって翻訳されたほか、菊池寛の『父帰る』、賀川豊彦『死線を越えて』、夏目漱石『門』などがフランス語で、当時、出版されていたことを確認することができる[4]。しかしながら、今日（２００９年）の翻訳事情から鑑みると、数は極めて少なく、作品の選択も、翻訳作品を求める人間の主観によるところが大きく、日本の文壇の潮流との直接的な接続はあまり感じられない。１９２６年のフランス語版『或る女』の前編の出版以降、今日まで、後編部分の翻訳本が出版されていないことからも、この出版には、翻訳者（好富、メーボン）、及び翻訳関係者等による特殊でパーソナルな事情を類推することができる。

また、二人の翻訳者は、日本とフランスを結ぶ政治的、文化的 milieu（環境）の中で、お互いの国家の利害と交流のために〈共同／協働〉した人物達であり、その二人によって単発的に有島の『或る女』が翻訳された背景には、この〈共同／協働〉体の意図するところの一端が有島の翻訳テクストに潜在的に託されている可能性があり、この背景を分析する事によって、有島がこの集団にとって象徴的存在として担っていた〈位置－配置(disposition)〉位置を顕在化させる事が出来るのではないだろうか。

よって以下の論考において、この翻訳書籍をめぐって残された諸コーパスを分析しながら、１９２６年のパリにおける出版の事情を紐解いていき、先述の〈共同／協働〉体における有島という個体（アンディヴィデュ）の機能（フォンクション）を探求するとともに、そこから従来の有島に適用されがちなディレッタントな職業作家のイメージに回収されることのない、国際的、政治的な役割を浮かび上がらせることを目論みたい。

１、『或る女』フランス語翻訳出版の特殊性と周辺事情

欧米言語[5]による有島武郎の創作の翻訳事情を一瞥[6]すると、創作のうち英語に翻訳され単著として出版されている作品は、ユネスコの企画として出版された『或る女』[7]と、『生まれ出づる悩み』[8]、『迷路』[9]の計三篇の英訳を確認することができる。この三作品の出版元は、東京大学出版、北星堂書店、Madison books と、前二つは東京、残りの一つはアメリカの出版社のものであるが、三点ともすでに入手に手間のかかる書籍となっており、英語圏の読者に膾炙しているとは言い難い。

フランス語においては、本稿が扱う『或る女』が翻訳され、かろうじて単行本化されてはいるものの、それも前編部分のみであるうえ、たいへん粗雑（ラフ）な翻訳で、章立てもオリジナルには忠実ではなく、今日の翻訳のレヴェルからみるとかなり問題の多い作品といえる。

また、『死と其の前後』[10]の英語訳、『小さき者へ』[11]、『カインの末裔』[12]、『宣言一つ』[13]のドイツ語による翻訳などを確認することもできるが、これらの有島の欧米言語への翻訳作品は何れもが短編であり、日本の小説や戯曲のアンソロジーを編纂する際に、その中の一編としてとりあげられた感が否めない。例えば、英語訳の『死と其の前後』は武者小路實篤の『或る家庭（*Family affaire*）』、鈴木泉三郎の『火あぶり（*Burning her alive*）』、ドイツ語訳の『小さき者へ』は川端康成の『伊豆の踊り子（*Die kleine Tänwerin von Izu*）』、田山花袋の『蒲団（*Futon*）』、北条民雄『いのちの初夜（*Nacht eines neuen*

Lebens）』、井伏鱒二『屋根の上のサワン（*Sawan auf dem Dache*）』などの諸作品[14]との抱き合わせで掲載されており、有島武郎という作家を喧伝するための紹介というよりは、日本の文学、文化を異文化の読者に伝達するという、より大枠の目的のために有島の作品が利用されたという方が妥当であろう。

また、他のヨーロッパ言語による有島作品の単独の翻訳著書については、管見の限り把握できていないし、フランスにおいて唯一日本人作家としてガリマール社から（プレイヤード）全集が刊行されている谷崎潤一郎、それに準じて相当数の作品が翻訳されすでに出版されている夏目漱石、川端康成、三島由紀夫、大江健三郎、近年、日本で著作が発売されると間髪を入れずに当地の言葉に翻訳されていく村上春樹、小川洋子などの海外において認知度の高い日本人作家に比べると、有島はマイナーな日本人作家の域を出ていないというのが実情である。

以上のような欧米における有島の芳しくない受容状態のもとで、１９２６年に出版されたフランス語版の『或る女』は、重版されるということも、異なる翻訳者によって再訳されるということもなかったため、時間の経過と共に忘れられていき、９０年代の中盤に至っては、日本文学の資料を専門的に収納している施設や、古本屋の片隅で稀に見つけることができる程度の書籍と化してしまっていた。

しかしながらこの頃から、非西洋世界において近代的（西洋的）自我を獲得する女性表象に注目が集まっていた為と推測されるが、日本の近代文学のなかで、所謂〈新しい女性〉像を扱った小説群が、南仏アルルのフィリップ・ピキエール出版社を中心として立て続けに出版され、その流れの中で、『或る女』のヒロイン・早月葉子にも「日本文学における、反抗的で明晰で情熱的な、真に近代的な最初の女性」[15]として光があたり、１９９８年４月に日本文学研究者のクリスティアン・ガラン氏が翻訳の一部を見直したうえで、同社より文庫版として再出版されている。

図２．１９９８年に文庫版として改訂された際の『或る女（葉子の日々）』（フィリップ・ピキエール文庫）の表紙

※翻訳の見直しをしたクリスティアン・ガラン氏が、再出版された書籍の序文において、ブランショの『焔の文学（*La Part du feu*, Gallimard, 1941）』を引きながら、フランス語のタイトルに〈女〉という言葉を使うと、小説はその女性の現実的な死を描かなければならないとして、好富・メーボン訳で用いられた *Cette femme-là* というタイトルを、*Les jours de Yôko*（『葉子の日々』）と改題して出版されている。

この時期にフランス語訳としてピキエール社より出版された同様の主題を扱った小説には、古井由吉『杳子（*Yôko*）』（１９９５）、樋口一葉『たけくらべ（*Qui est le plus grand ?*）』（１９９６）、永井荷風『腕くらべ（*Du coté des saules et des fleurs*）』（１９９８）、有吉佐和子『香華（*Le miroir des courtisanes*）』（１９９８）、泉鏡花『化鳥（*La femme ailée*）』（２００２）、『化銀杏（*Une femme fidèle*）』（２００３）などがあげられる。

再出版された『或る女』では伊東深水の〈ベルベット石鹸〉の美人画が表紙として用いられていることが象徴的であるように、これらの翻訳された小説の表紙には、これ見よがしに日本人女性を描いた絵画がメインになっており、『或る女』のフランスでの再出版が、有島武郎という作家への単独の評価ではなく、かつてアンソロジーの一編として有島作品が翻訳されたように、日本における〈新しい女性〉表象の一例の範疇に停まっていることを物語っている。

しかし、この再出版は、それなりにフランス語圏の読者に、有島武郎という日本人作家へ興味を抱かせるための契機とはなったようで、２００３年にはスイスのジュネーブ大学で、準博士課程（ＤＥＡ）論文として「アンビバレンスとヒステリー」というタイトルの『或る女』論が[16]ルシア・モナン氏の手によって執筆されているし、パリの日本学研究機関 INALCO（国立東洋言語文化学院）においても、有島の小説『一房の葡萄』が一般教養課程の学生を対象とした日本語の授業で、翻訳練習のテクストとして使用されていたことが確認されている。また、執筆者もこの間に、パリ第三大学大学院に『或る女』を主として扱った論文を二本ほど提出[17]させていただいたが、執筆中、当地において、１９９８年に再出版された『或る女』を読んだという複数のフランス人読者[18]に出くわしたり、公的な図書館の外国語文学のコーナーで当該書籍を見つけたりしたことなどを通じて、少ないながらも、学際、及び公的な場への流布というものを感じた。

現在においても、比較的大きなフランスの書店では、このピキエール社から再出版された『或る女』の文庫版が陳列されていることなどからも、この再出版が契機となって、半世紀以上ぶりに有島武郎という作家の名前が、フランス語圏の読書家達の耳に届くようになったということは事実と云って差し支えがないであろう。

２、翻訳者について　－有島武郎との〈共同／協働〉の可能性－

昨今のトランスナショナルな空間が創出する〈越境〉や〈グローバリゼーション〉という概念をめぐる喧しい議論がしばしば提示するように、〈点〉と〈点〉とをつなぐ〈線〉を描くために費やされる時間は加速度を増しながら短縮され、〈起点言語〉と〈目標言語〉とを結ぶ〈翻訳〉という行為に費やされる時間も、この短縮化という網の目を掻い潜ることはできなかった。むしろ、この事は、文学の可能性を広めるという意味においては歓迎されるべき現象といえよう。

その結果として、昨今のフランスにおいては、２００３年に木山捷平文学賞を受賞した平出隆の『猫の客（*Le chat qui venait du ciel*）』が２００４年に、２００４年に芥川賞を受賞した綿谷りさの『蹴りたい背中（*Appel du pied*）』が２００５年にフランス語に翻訳され出版[19]されているように、日本においてセンセーションを呼んだ書籍は、翻訳の絶対量こそ多いとはいえないものの、比較的短期間、早いものでは日本での出版とほぼ同時にフランス語に訳されて出版されるようになっている。

とはいえ、交通網、情報網が今日のように発達していなかった１９２６年に、フランス語版『或る女』がパリにおいて出版されたということ、つまり、１９１９年に『或る女』の前編が『有島武郎著作集』第八集として有島の友人・足助素一が経営する叢文閣より刊行されてから７年、巷間を騒がせた波多野秋子との心中から僅か３年で出版されたという事実は、勿論、当時、全く日本の小説がフランス語に訳されていなかったというわけではないが、他の一般的な書籍に比してかなり例外的な速さでの翻訳出版といえる。

本論の冒頭でも引用した松尾邦之助の言及のように、当時のフランスのマーケットが日本文学の翻訳出版を求めるといったことはほぼ皆無な時代であって、元来、そのような歓迎されざる日本文学のフランス進出は困難を極めるものである。そのような状況下で、出版にまで漕ぎつけたというのは、翻訳を希求するもの（時にそれは翻訳者自身）の周到な計画と、それを実現させるための熱意、そして時代に委ねられた偶然性の賜物といえるであろう。

有島を「日本人のただ一人の文学の先生」として親炙に浴していた作家・芹澤光治良は、フランス語版『或る女』が出版された当時、パリに留学していて、出版の経緯の一部を耳にしている。[20]そのことについての芹澤の回想から察するに、翻訳書籍の出版への大きな要因となっているのは、日本人翻訳者・好富正臣

による有島への「崇拝する作家に報いようとした」思いであり、この報恩の思いに、１９２６年当時、好富がパリに実際に逗留し、日本大使館に勤務していたこと、その年が、先述の有島生馬の言及のように有島武郎の死の「三周年にあたつて」いたこと、芹澤曰く、「フランスのインフレのおかげで、この若い日本人は留学費から出版費を出すことが容易であるらしく、自費出版のような形式で、フラマリオン社に出版を申し出」[21]たことなどが複合的に絡み合って、好富の念願のフランス語版『或る女』の上梓は成就されたと考えるのが状況的に妥当であろうし、のちにフランス学士院のメンバーとなるアンドレ・ベルソールが、「日本女性の近代的な目ざめを描いて、日本では絶賛を博しているそうですが、古くて、退屈です。外交官補のフランス語の先生が、手を加えているようだが、フランス語のスタイルになっていない」[22]と言っていたと芹澤が書き残していることなどから、フランス人読者からはあまり好意的に受け取られていなかったことが伺われる。

それでは、有島の小説『或る女』を翻訳し、自分の身銭を切ってまでしてパリの出版社から刊行させた好富正臣なる有島を慕う人物は一体、如何なる人物だったのであろうか。そして、共同翻訳者となっているフランス人のアルベール・メーボンとは何者で、どのような経緯で翻訳にかかわるようになったのかを、残っている資料などを活用して検討し、この二人の翻訳者のコラボレーション（〈協働〉）にはどのような意味があり、どのようなコミュニティー（〈共同〉体）を形成していたのか、共同体における二人の〈位置－配置(disposition)〉を浮かび上がらせていくとともに、この共同体への有島の役割と介入の可能性を探っていきたい。

まず、日本人翻訳者の好富正臣についてであるが、１９２２年に文官高等試験外交科に合格、翌年、東京帝大の政治科を卒業し外務省に入省、フランスに渡り在外研究生としてパリの日本大使館に勤務する傍ら、ソルボンヌ大学で経済学を学んでおり、この留学期間中に『或る女』をフランス語で翻訳したほかに、フランス語による著作や日本の小説の仏訳を数点残し、その後は、帰朝して欧米局事務官など対西洋を中心とした職務に服している。１９４２年以降、政府の対中国政策に駆り出され、新京総領事、南京総領事などを歴任したが、１９４３年４月に、南京において病気のため弱冠４５歳の若さで帰らぬ人となっている[23]。

芹澤光治良は、有島武郎が１９１８年から定期的に、一高や東京帝大を中心とした学生達を麹町の私邸に集めて、ホイットマン詩の講読と時事放談を目的として催していた〈草の葉会〉というサロンに参加しており、「その訳者も草の葉会の会員の一人であろうと、先輩だった東大生を幾人も思い出したが、ヨシトミという人は思い当たらなかった。」と好富のことを記憶していない一方で、〈草の葉会〉への参加時期を、芹澤は、「旧制の一高の二年生の時から大学二年頃まで」[24]と、有島の作家としての人気のために大勢の学生が押し寄せたとされる有島晩年の〈草の葉会〉[25]に参加していないこと、同様に参加者であった作家の大仏次郎が、「当時の動揺した社会情勢を反映して」、「草の葉会の話題が、文学のことよりも社会問題の話が多かった」とし、「法科、政治科の学生の発言が多かったようで、文学派はおとなしく聞き手に廻っていた。」[26]と、政治科に所属する好富が参加しやすい状況が整えられていたこと、芹澤の単純な思い違いなども考えられるため、尚早に好富の〈草の葉会〉への参加の可能性を排除することはできない。

また、東京帝大政治家 OB の鶴見祐輔が麻布の私邸において、有島同様に一高の弁論部に関係した学生達を集め〈火曜会（ウイルソン倶楽部）〉を主宰していたが、この会に有島が頻繁に顔を出して話をしたり傍聴していたことが縁となって、有島と鶴見の友情が深まり、会員達の間にも交流が生まれていたことを鶴見の回想[27]などから確認することができる。芹澤は、この鶴見の〈火曜会〉にも参加しており、１９３６年の『報知新聞』掲載された「女婿教育の味」という文芸時評[28]では、外務省で好富の先輩となる芦田均が駐ロシア大使館の書記官だった頃に、〈火曜会〉において有島と座談が行われた思い出を記していることなどから、好富が〈草の葉会〉の会員でなかったにしろ、鶴見の〈火曜会〉で有島の講演を聞くなり、会話を交わ

すなどしたことが契機となって、有島を崇拝するに至ったということも十分に考えられる。このような経緯から、好富は有島の単純な愛読者であったというよりは、実際に有島と交流のあった人物か、少なくとも自身の東京帝大、外務省などの知人を介して有島と間接的には交流のあった人物といえるだろう。

一方のフランス人翻訳者のアルベール・メーボンは、松尾邦之助と深い親交のあった人物であり、松尾の思い出によると、「彼はル・タン誌の東京特派員として二三年日本に滞在し、東京外語のフランス文学史の教授で、私とは師弟関係にあつた。（略）東京にゐたころからキク・ヤマタ等と日仏文化提携に献身的に働いてゐた。たしか、東京神田にあつたフランス書院は彼の努力で開かれたものである。」[29]となっている。この仏蘭西書院はメーボンが夫人とともに経営していたもので、フランスを中心とした泰西の図書・美術品の閲覧室、輸入販売所、語学教室、情報交換の場として機能していたことが確認できるとともに、後援会が設けられていて、この会にはフランスに所縁の深い当時の文化人たちが参加していたことが知られている。[30]メーボンは在日時、日本におけるフランス宣伝のために日仏両文で書かれた総合雑誌『極東時報』の主筆兼社長としても辣腕を振っている。１９２２年の帰国後は、親日家としてフランスにおける日本の文化の紹介に努めたため、戦時下のフランスにあって不遇な晩年を送ることになってしまうが、日本に関係する書籍を執筆する傍ら、「メルキュール・ド・フランス誌には、Lettre du Japon と題して十年一日の如く日本文化の紹介記事を連載しつづけてゐた。」[31]とあるように、日本に赴任していた時とは反対に、フランスにおいて日本の紹介を献身的に行っていたことが理解される。

また、最晩期の雑誌『白樺』の発行所が仏蘭西書院に移っていたり、有島生馬が「自分も大半の金はそこに預けている」と、この書院に大きな投資をしている[32]ことなどから、メーボンと白樺派の密接な繋がりが浮かび上がってくる。加えて、有島武郎が『白樺』に掲載した記事の内容や、大量の洋書を私的に所有していたことや、メーボンが日本に逗留していた１９１７年７月６日付の有島の日記には、「仏国公債払込に付山本に印を貰ふ事」、翌日の７日の処には、「仏国公債払い込みのため、十五銀行と正金銀行へ行く。」[33]という書き込みが見られるように、有島とフランス政府が発行する国債を購入していた事実などから、二人の係わりが直接的であったか、間接的であったかというところまでは現在のところ断定するには至っていないが、メーボンも有島の周縁で活動していた人物であったと考えても差支えはないであろう。

松尾邦之助が、メーボンを「健康を害し（略）五十を出て間もない働き盛りで故人になつてしまつた。」[34]としてその死を悼んでいる。偶然の夭折ではあろうが、好富とメーボンという二人の翻訳者は戦後を生きることができなかった。執筆者による叶わぬ願望ではあるが、この二人の翻訳者が戦後の数十年を健康な状態で生き、戦前のようにして日仏交流のために尽力していたならば、『或る女』の後編や他の有島作品の翻訳の話が企画された可能性も十分ありえただろう。その場合、有島武郎という作家のフランス語圏における認知度は、今日のほぼ無名である状態よりは期待できたものと考えられるだけに、二人の早すぎた死が惜しまれる。

しかしながら、二人の経歴や日本とフランスとの間での立ち位置を検討する事によって、それぞれが所属する〈共同〉体の政治的、文化的目的が競合する部分が見えてきた。その中で、二人の〈競合〉の最たるものが『或る女』の翻訳という行為であったといえるであろうし、二人の翻訳者の周辺には、有島と密接な関係を持っていた人間達の影を見てとることができるのであるから、有島がこのコミュニティーに取り込まれる、更に言えば一翼を担っていた人物として配置しなおすことができるのではないだろうか。二人の翻訳者の単純な嗜好性から『或る女』という小説が選ばれたのではなく、二人の集団のなかに有島が組み込まれ

〈協働〉する存在であったという下地があったからこそ、有島の小説は翻訳のターゲットとなりえたのではないだろうか。

有島を安直に白樺派の一作家、または大正期の西洋芸術の受容に寄与した一人物という一方的な側面から捉えてしまうことは、有島の多くの本質的な部分を閑却し、実像とは違った歪な有島像を塑像する行為に近いといえる。勿論、有島の美術、文芸領域における時代に対する寄与を看過することはできないが、この点を含め、有島武郎という人間と周縁人物との関係を、政治的、学際的、文化的なアスペクトでより複合的に掘り下げ、有島が〈協働〉した〈共同〉体を（出来る限り）正確に記述していく行為こそが、有島が歴史に対して担った位置を最も明瞭に浮かび上がらせる手段なのではないだろうか。

3、テクストが語り得るもの

二人の翻訳者の日本とフランスを股にかけた足取りが、有島が〈協働〉した〈共同〉体の実態の一端を開示させる可能性を示唆しているように、フランス語版の『或る女』は、テクスト・レヴェルにおいても、その〈共同〉体を顕在化させる端緒を垣間見せてくれているように思われる。

翻訳テクストは、ベルソールの「フランス語のスタイルになっていない」という言葉が象徴するように、日本人（好富）がフランス語に訳したものを、フランス人（メーボン）が手直しするという形式をとっていたものと考えられ、フランス語として通りの悪いところが散見している。また、かなりの部分が翻訳者によって意訳、もしくは単純化されて訳されてしまっているため、有島の優麗典雅な風景描写や、誠実さの迸るような文体は悉く霧散してしまっている。しかしながら、プロットそのものは原書に対して比較的忠実に維持されており、その結果、フランス人読者に、筋を追ってはいけるものの、技巧も描写も単純化されすぎていて、「古い」、「退屈」という感想を抱かせる翻訳書籍となってしまったといえよう。

それに加えて、冒頭に作品と作者についての簡単な但し書きは付け加えられているものの、注も全２４７ページの本文中、１０箇所程度のみであるし、文末脚注も施されていない事など、異文化圏のテクストである小説をフランス人読者に紹介するには全体的に不親切な翻訳といえる。この事は、文化的なコンテクストの差異を棚上げにして、有島武郎の作品をフランスの市場に流通させたいという翻訳者のプライベートな願望が優先されている事を物語っているだろう。また、東京の国立国会図書館（旧帝国図書館）をはじめ、複数の日仏に関係した機関に献呈されたり、日本国内にこの本がそれなりの数で残っている事を鑑みると、この翻訳自体が、フランスに住む一般的なフランス人読者を対象とした翻訳であったというよりは、日本国内、特に知識人階級に帰属している者たちに向けて、フランス語で『或る女』が出版されたという出来事を知らしめる為のパラドクサルな翻訳行為であったというきらいがある。執筆者はこの点が、前編が極めて粗雑（ラフ）に訳されていることと、後編部分が同時、もしくは後発として刊行されなかったという事象に帰結されているように思えてならない。

このような訳者による翻訳行為における恣意性という問題を考慮したうえで、有島の原書（オリジナル）と対照させながら、執筆者が翻訳テクストを読み進めていった際に気にかかる事として、小説において前編の山場として知られているヒロインの葉子と愛人となる倉地の関係が肉体関係に発展する場面を頂点としてのフランス語の運用が、ベルクソン哲学からの影響を強く示唆させているという点があげられる。有島の手による原著（オリジナル）においてその場面に該当する部分は、

> もとより葉子はその朝倉地が野獣のような assault に出る事を直覚的に覚悟して、寧ろそれを期待して、その assault を、心ばかりでなく、肉体的な好奇心を以て待ち受けてゐたのだつたが、かくま

で突然、何んの前触れもなくなく起つて来ようとは思ひも設けなかつたので、女の本然の羞恥から起こる貞操の防衛に駆られて、熱し切つたやうな冷え切つたような血を一時に体内に感じながら、抱えられたまゝ、侮蔑を極めた表情を二つの眼に集めて、倉地の顔を斜めに見返した。その冷ややかな眼の光は仮初な男の心をたじろがす筈だつた。事務長の顔は振返つた葉子の顔に往息気のかゝる程の近さで、葉子を見入つてゐたが、葉子が与えた冷酷な眸みは眼もくれぬまで狂はしく熱してゐた。（葉子の感情を最も強く煽り立てるものは寝床を離れた朝の男の顔だつた。一夜の休息に凡ての精気を十分に回復した健康な男の容貌の中には、女の持つ総てのものを投げ入れても惜しくないと思ふ程の力が籠つてゐると葉子は終始感ずるのだつた）[35]

とされていて、確かに〈直覚的〉という表現や、出来事に対する予測不可能性（imprévisibilité）などは、ベルクソン哲学からの影響、援用を予感させているようにもとることができる。しかし、執筆者の印象からすると、有島が人生集大成の評論として１９２０年に発表した『惜しみなく愛は奪ふ』において展開されている、知識人に典型的な理知的生活≪智的生活≫からの発展として、有島が真実の恋愛において成就すると考えていた完全なる自由を獲得した生活≪本能的生活≫への移行をこのシーンでは描こうとしたいたのではないだろうか。少なくとも、このように考える事の方が、より自然なテクスト解釈という事が出来るであろう。それでは一方の、好富・メーボン訳のフランス語のテクストの方の該当する部分がどのように翻訳されているかというと、

Elle avait eu **l'intuition** que cet assaut de bête fauve aurait lieu un matin proche de l'arrivée, et elle l'avait attendu avec une sorte de curiosité morale et charnelle. Cependant elle n'avait pas imaginé qu'il se livrerait à une telle attaque sans préliminaires… Aussi, animée par **l'instinct** de défense commun à toutes les femmes, elle jeta sur Kouratchi un regard furieux qui eût arrêté bien des hommes. Les deux visages se touchaient, elle sentait la respiration du mâle dont rien ne pouvait briser **l'élan**. Ce facies était celui de l'homme au réveil, chaud encore de la tiédeur du sommeil ; elle se souvint que ce qui tente toutes les femmes est la force qui se dégage de la physionomie masculine, quand **l'énergie** foncière a été recouvrée dans le repos de la nuit.[36]

[拙訳]　葉子は、その朝、野獣のこの assault が起こるという直覚（l'intuition）を得、心のみならず、肉体的なある種の好奇心を持ってそれを待ち受けていた。しかしながら、このような何の予兆もない assault であろうとは、彼女には思いもよらないことであった…そして彼女は、すべての女性が有する防衛本能（l'instinct）によって、男性というものを強くたじろがせる獰猛な視線を倉地に投げかけた。二つの顔は交錯し、そこに彼女は決して打ち砕くことのできない熱気（l'élan）を孕んだ雄の息気（いき）を感じた。その男の顔は、眠りの心地よさによって熱をはらんだ起きたての男の顔であった。それは彼女に、一夜の休息によって本質的な精気（l'énergie）を回復した男の顔つきには、すべての女性を魅了する力があることを思い出させた。

となっている。原文と比較するとかなり簡潔な訳になってしまっているが、この一節は、（勿論、晩年の有島がベルクソンの〈生〉の哲学から少なからず影響を受け、評論などにおいて度々言及しているという事実に基づいた執筆者の先入見も左右しているのであろうが、）ベルクソンの代表的著作である『時間と自由意思』、『創造的進化』などで頻出し、なおかつ〈生〉の哲学における重要なキーワードとなる〈直観 l'intuition〉、〈本能 l'instinct〉、〈熱気 l'élan〉、〈精気 l'énergie〉などのフランス語の単語が挟み込まれて

いることが見てとられるし、節全体としても、（スタイルの違いというものはあるものの）ベルクソンによる語の運用を真似たような印象さえ与えられてしまう。このような印象は、安川定男氏が「有島武郎とベルグソン」という論文のなかで仮説として提示した、次の一文を喚起させる。安川氏は、「有島はこの作品（『或る女のグリンプス』）の第十五章以下において、主人公田鶴子（のちに『或る女』前編として手を入れた際、葉子と改めた）の事務長倉地に対する愛憎のもつれ合った不思議な感情のうずまきを描写しているので、その際、あるいはベルグソンから受けた暗示を多少とも生かそうとしたかもしれない。」[37]と、まさに当該の部分を指摘しながら、15章以下におけるベルクソンの〈生〉の哲学からの影響の可能性を指摘する。

有島は、自身の生活三形態論において、もっとも崇高な生活の根幹をなすにもかかわらず、科学によって歪められてしまったと考える〈本能〉という言葉が、ベルクソンによって「正しき意味に於て用い始めた」と断言[38]し、〈生〉の哲学を生命の真に赤裸々な表現であると称揚している。また、当時の有島が、ベルクソン・テキストの読解を試みていた事は、有島の残した「Creative Evolution 梗概」と書かれたベルクソンの『創造的進化』、及び、ベルクソン哲学の概説が書かれた文章を読んだ上で執筆されたと判じられるノートにおいても、〈本能〉、〈直覚〉といった言葉に特に注意を払って筆を進めている事が理解され、晩年の有島による創作活動に、ベルクソン哲学の影響を感じ取ることに些かの疑念を抱く余地はないであろう。[39]

有島が、学友であった生物学者の木村徳蔵に宛てた、「近頃会心の思ひを以て読みたる書は Bergson の "Time and Free Will"に候。仏国人の直覚的なる総意は聡彗と真率の織り出したる抒情詩なりと存申候。」[40]、同様に弟の生馬にあてた、「先達来ベルグソン氏の『時と自由』を読みて暗示を得る処多きを覚え申候間、（略）。英訳によりて見るも同氏の創意的なるは花の如くに候得共原文にてはさぞ力強きものと存居候。閑余御一読如何。」[41]というベルクソンを礼賛し、書見を促す文面の二通の手紙や、谷川徹三が、有島が主宰した〈草の葉会〉での思い出として、「ベルグソンの自由意志論について有島さんのいつたことが、ベルグソンのいつてゐることと少少違つてゐたのなどを訂正した」[42]という一文からは、有島が『創造的進化』に加えて、『時間と自由意思』についても読んでいた事が理解されるし、〈草の葉会〉での議論の俎上にベルクソンの哲学が上がっていたという事は、有島がベルクソンに興味をもっているという言説を、周縁の学生、知識人が形成するコミュニティーに流布させた事は想像に難くあるまいし、『或る女』をベルクソン哲学の影響下に書かれた小説として読み解いていく読者が生まれた可能性もありえたのではないだろうか。

フランス語版『或る女』の翻訳者である好富正臣も、何かの機会に、有島がたいへんベルクソンから影響を受けていたという情報を手に入れていて、翻訳をおこなう際、特に葉子と倉地の恋愛をめぐるシーンにおける〈直覚〉や〈精気〉といった語の運用や、小説全体にわたってヒロインの心象が醸し出す創造的な雰囲気の背後にベルクソン哲学の確かな影響を認め、安川氏の推論よりもさらに先鋭的に、『或る女』がベルクソンの〈生〉の哲学の影響下に成立した小説として、その影響を読者に知らしめる、共有する目的で、ベルクソン哲学に密接に関連した語彙を積極的に用いたのではないだろうか。

有島が、ベルクソンの純粋持続の状態を、自身が生活の最高の形態として措定する本能的生活に譬え、この生活は、純真な子どもの心と真実なる恋愛においてのみ成就されるとしている点を翻訳者が汲みとり、ヒロイン・葉子とその愛人・倉地との恋愛に関係する描写の翻訳に恣意的に反映させていき、その意の通りにフランス語版の読者に作用していたとしたならば、読者は、小説を読み進める作業のなかで、当時の日本の知識人階級の間には、ベルクソンが確立した哲学が浸透していた事をエコーのようにして示唆されたであろうし、ベルクソン哲学への一解釈として、生命の絶え間ない創造的発達状態を男女の恋愛の体現に求めた点に、少なからぬ関心を抱いたのではないだろうか。

これらに関連して興味深いのは、1910年代から30年代にかけてのベルクソンにおける〈純粋〉や〈エラン〉という概念に対しての思想的変遷があげられる。有島が読んだことが確認されるベルクソンの『時間と自由意志』は1889年、『創造

的進化』は1907年に上梓されている。この時点で、ベルクソンはすでに〈純粋〉や〈エラン・ヴィタル〉という概念を用いて〈生命〉に対して考察を加えてはいるが、この段階では、愛が生命に対して重要な要素を担っているとはしているものの、ベルクソンの生に対する分析はどちらかといえば理知的で、愛を感情の諸要素の一構成概念程度のようにしか扱っていないようなところが見受けられる。

しかし、1932年に出版される『道徳と宗教の二源泉』に至ると、ベルクソンは『創造的進化』からの結論を超えると明言しつつ、「宇宙は愛の、また愛する要求の目にみえ、触ることができる姿にほかならず、この創造的な情動がもたらすあらゆる帰結をもたらす」[43]と言明するように、宇宙の根源を司るものとして神に支えられた〈愛〉の生に対する最重要性、不可欠性を、〈エラン・ヴィタル(élan vital)〉概念を〈エラン・ダムール(愛の飛躍)(élan d'amour)〉へと敷衍させながら説いている。

この時期、ヨーロッパにおいてナチスに代表される反ユダヤ主義の台頭の中で、ユダヤの血を引くベルクソンが生命の本質として、愛の概念にすがらざるをえなかった点に関しては必定の運命であったのかもしれない。しかしながら、執筆者はここで、これから提言する仮説を絵空事として一笑に付す者がいる事を理解したうえで敢えて論を展開していくが、1926年に好富正臣によって翻訳されたフランス語版『或る女』が、1932年のベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』の〈愛〉、特に〈エラン・ダムール〉に何らかの影響を与えていたのではないかと、ベルクソンから有島にではなく、逆に有島から遡行的にベルクソンの思想の変遷に関わる影響があったのではなかろうかと野心的に考えたい。

勿論、ベルクソンの〈生〉の哲学が、当時の日本の知識人たちを余すことなく席巻していたことを考えれば、執筆者の推論は大海の水を堰くような虚しい営為の一つのように映るかもしれないが、有島からベルクソンへの思想が伝達される通路が全くなかったと一刀両断に断定するのは、大枠の歴史に目を奪われてしまったがゆえに、関係人物達が〈協働〉する〈共同〉体のプライベートな歴史を細部にわたって検証するというファンダメンタルな作業をなおざりにするに等しい。この〈共同〉体（それがどんなに小さく、静的なものであっても）を浮かび上がらせて記述していく作業こそが、境界、先入見のない歴史を顕在化させ、そこに存在していた人間達の営為を出来る限り透明に評価する契機となり得るであろう。

では、ベルクソンから有島武郎への影響という一般的（所謂、西洋中心主義的）な視点からではなく、有島からベルクソンへという可能性の扉にアクセスするツールを執筆者はどこに求めているかといえば、有島が札幌農学校時代に知遇して以来、終生、無二の師として敬愛の念を抱き続けた新渡戸稲造という存在に対してである。新渡戸は、アメリカ大統領のウッドロー・ウィルソンが提唱した国際連盟の初代事務次長を務めるために、１９１９年から２６年に後任の杉村陽太郎に職を譲るまでの７年間、ジュネーブに居を構え国際連盟の仕事に従事している。この間の１９２２年に国際連盟の諮問機関として国際知的協力会（現・ユネスコ）が設置され、ベルクソンがこの期間の会長に就任した事が契機となり、新渡戸とベルクソンの間に親交が生まれている。

二人の交流は、たいへん親密なもので、お互いの邸宅、別荘を頻繁に行き来したり、手紙のやり取りがあった事を確認する事が出来るとともに、新渡戸は帰国後に、「屢ベルグソン氏に逢ふたのは我輩の在外中の役得であつた。（略）この世界の第一人者たる同氏と親しく交はつたことは千百の書を読破したより我輩によき教訓となつた。」[44]と、ベルクソンとの出会いを格別のもとして振り返るまでの友情に発展している。

新渡戸の回想から想起される二人の会話の内容は、精神的にたいへん深い次元にまで及んでおり、ベルクソンが晩年興味を抱いていたことで知られる神秘主義、新渡戸が熱心に信仰していたキリスト教のクエーカー派、日本の仏教の禅など、宗教的な領域にまでわたる話が二人の間で熱心に話し合われていたという、新渡戸とベルクソンとの濃密な心の交感から察するに、日本の思想や文学の話題がなされていなかったとは考えにくい。

新渡戸の東京帝国大学教授時代の弟子である鶴見祐輔が、新渡戸から札幌農学校の教授時代の思い出を聞かされる際には、いつも『有島が、有島が』と、格別な教え子として話して「自分の子のような親しみを持って」有島の名前を出していた[45]とする事などからも、既に人気作家となっていた有島の衝撃的な心中のニュースを新渡戸は国連事務次長の任期の間に、それもベルクソンと頻繁に顔を合わせていた時期に耳に入れているのだし、そうでなくとも新渡戸の言説からは有島に関する言及が始終繰り返されていたのだから、新渡戸とベルクソンの会話の俎上に、何らかの形で相思相愛の弟子である有島の話題が上がっていたと考えても差支えはないであろう。当時のジュネーブには有島の〈草の葉会〉の会員であった前田多門なども国際労働事務局（ILO）の日本代表として駐在していたのだから、会食などに際して、日本人たちを中心として有島の話題が共有される事はごく自然な事であったといえる。

また、芹澤光治良は、フランス語版『或る女』を出版したフラマリオン社のことを、ベルソールが、「シャボンを生産するように小説を出版する」[46]と批判していたとしているが、当時よりフラマリオン社はフランスにおける押すに押されぬ大出版社の一つであり、一介の外交官補が簡単に翻訳本を出版するとは考えにくく、背後には日本大使館などの組織だった後ろ盾があった事が容易に想像されることに加えて、フランス語版『或る女』の出版された１９２６年は、新渡戸が１２月に事務次長としての職を全うし帰朝する年であった事などから、新渡戸がその記念の意味も含めて、この出版に至るまでの過程を好富の背後で見守っていた可能性も残されているだろう。

こうした推論の糸をたぐっていけば、出版に際して、フランス語版『或る女』のテクストが、何らかの形でベルクソンの手元まで届き、目を通すという僥倖にあずかった可能性さえも考えられるようになってくるのではないだろうか。そうでなくとも、ベルクソンが、新渡戸から、ベルクソンの哲学を援用させたうえで成立している有島の思想についての説明を受けていた事も大いにあり得ただろう。こうしたことが実証的に証明できるとしたならば、有島の本能的生活における純粋持続の実践のあり方が、遡求的にベルグソンの後期の哲学に影響し、ベルグソン最後の著書の『道徳と宗教の二源泉』にみられる〈生〉の哲学の発展としての〈愛〉の哲学に何かしらの示唆を与える余地すらも検討の対象とすることができる。そのためにも、当時のフランスに滞在していた有島と所縁の深い日本人と、彼らがかかわりをもったフランスの知識人たちが〈協働〉することによって創造された〈共同〉体の実態を丹念に浮かび上がらせることによって、有島武郎という存在がその集団のなかで担っていた〈位置－配置(disposition)〉を割り出し、有島を国際外交的、つまり政治的な〈共同〉体のなかで再定義することが必要であろう。

結び

１９２６年にパリで出版されたフランス語版『或る女』のテクストを取り上げ、歴史的な事情から鑑みての（フランスのマーケットが求めていた書籍ではなかったにもかかわらず、極めて迅速にフランス語に翻訳され出版されたという）特殊な経緯を掘り下げる事は、この本の共同翻訳者の好富正臣とアルベール・メーボンが帰属した、当時の日本とフランスにまたがって〈協働〉したディプロマティックな〈共同〉体を浮かび上がらせる。

好富が所属していた〈共同〉体は、東京帝国大学、外務省などの日本の選良たちが集い、国際外交に携わる者たちによる先鋭的な場であるとともに、内的には、精神的な紐帯によって深く結ばれた場であり、二重の意味における〈協働〉を包含した〈共同〉体であることが理解され、好富が身銭を切ってまで『或る女』をフランス語で出版したという有島への景仰の念をみるとき、好富の背後に、一高、帝大の弁論部、文芸部、

人物の姿を御旗に〈協働〉していた集団の影を感じる事ができる。

もう一人のフランス人翻訳者アルベール・メーボンも、ル・タン誌の在日特派員、極東時報社長、仏蘭西書院院主、東京外国語大教授と、当時の日本のフランス（欧米）受容のフランス側の窓口を担った人物であり、また同時に、フランスにおける日本文化の発信者の役割を担っていた日本とフランスの懸け橋となっていた人物である。勿論、このような仕事は一人で成し遂げられる種のものではなく、メーボンの周りには、日仏の政治家、文化人、学者、ジャーナリストが相当数控えていて、彼らが〈協働〉することによって、包括的な〈共同〉体となって、日本とフランス間の公式、非公式のディプロマシーの裾野を開拓していったといえるであろうし、この〈共同〉体は、パリの日本大使館で外交官補として働いていた好富の帰属する集団や、仏蘭西書院に多額の投資をしていた有島生馬[47]のそれをはじめ、多くの進歩的な日本人や、日本に興味を示すフランス人たちを巻き込んで拡大し、それまでの日本においては想像もできなかったような国際的な潮流を生み出すような場（champs）足りえたであろう。

この場は、好富に有島の『或る女』のフランス版を出版する機会を与え、有島の師匠の新渡戸稲造にベルクソンと深い友情を構築する時間を提供した。これらの結びつきは、個別に見たならば断片的なものにすぎない。しかしながら、ここに集う人々を総体的な〈協働〉する〈共同〉体としてとらえなおしていくことによって、一般的には、日本が欧米（フランス）から一方的にモダニティー（modernité）を（とくに文学の領域では）学んだと考えられがちであるが、少なからず、ジャポニスムという表象的なモードのレヴェルを越えて、思想的、形而上学的な次元において日本から西洋へのフィード・バックを確認する事が出来るのではないだろうか。

そこで本論後半部では、状況証拠を重ねるような形で、『或る女』のフランス語版が、ベルクソン哲学の有島への影響（ベルクソン哲学に関連した語の運用）と有島の解釈（〈純粋持続〉が〈愛〉によって体現される≪本能的生活≫）が反映された上で好富正臣によって恣意的に翻訳され、その書籍が、何らかの形でベルクソンまで届き、ベルクソンの後期の思想〈エラン・ダムール〉に影響を与えたのではないかという、一つの可能性の提示を試みる事に努めた。決定的な証拠がないという意味において、物証主義の見地からは受け入れ難いものかもしれない。しかし、ヴォルフガング・イーザーが『行為としての読書』において、予想されたであろう批判を恐れずに、「解釈はテクストの意味の解明［限定］にあるのではなく、テクストが内包する意味の可能性をあきらかにするのでなければならない。」[48]と高らかに宣言したように、テクストが語る可能性を提示していく事は、物証主義では拾っていくことのできない、消えていくものたちの〈誠実〉な声を拾っていく最後の砦となるだろう。

有島武郎は、この翻訳に関わった多くの人間達から尊敬される象徴視された存在であった。そして、この翻訳をめぐるうえで形成されている〈共同〉体は、日本とフランスの狭間で、文化、経済、言語などの接触（コンタクト）を内包しながら、国策を左右するレヴェルの権限を持ち得る、極めて政治的な集団であった。この事から、有島武郎は単に、作家であったのでも、西洋受容の一端を担ったのではなく、日本の国際外交を担う人間たちの精神的支柱として機能し、彼らの決定の場において、顕在的、潜在的な形で影響を与えていたと断言できる。そういった意味で、『或る女』のフランス語テクストはその顕在的な形の一端、そしてそこからの可能性を見せてくれる〈書籍〉であり〈存在〉といえる。

---

[1] 佐藤隆三編・改造社１９２６

[2] 有島生馬／佐々木隆三編・私家版１９２６

[3] 松尾邦之助「海外から見た日本文学の地位」『フランス放浪記』鱒書房１９４７,p.190.

[4] Cf. 同前：「フランス人から頼まれるがまゝパリの雑誌に筆者の手で公表されたのは川端康成の小品二三と芥川龍之助の『袈裟と盛遠』に『南京のキリスト』それに一葉の『にごりえ』だけである。」

[5] 韓国、中国などのアジア諸国においては、周作人などの功績により、相当数の有島の翻訳を確認することができるが、その点に関しては、執筆者の専門の範疇から零れるものであり、割愛する。

[6] 執筆者による現在（２００９年１０月）までの調査によるものであり、本論で言及されていない翻訳作品の存在が予想され、その点に関しては、今後の調査の結果に委ねたい。

[7] *A certain woman*, University of Tokyo Press, Tokyo, 1978. Tr. Kenneth Strong.

[8] *The agony of coming into the world*, Hokuseidô press, Tokyo, 1955. Tr. Seiji Fujita.

[9] *Labyrinth*, Madison books, Boston, 1991. Tr. Shinoda Seishi and Sanford Goldstein.

[10] *<Death>, New plays from Japan*, Ernest Benn, London, 1930. Tr. Yozan T. Iwasaki and Glenn Hughes.

[11] *<Meinen kleinen>, Moderne japanische erzählungen*, Gustav Langenscheidt jr, Berlin, 1942. Tr. Oscar Benl.

[12] *<Ein nachkomme kains, Träume aus zehn nächen >, Japanische erzählungen des 20*, Theseus verlag, München, 1992. Tr. Jürgen Berndt.

[13] *<Ein manifest>, Nachirichten der gesellschaft fuer natur – und voelkerkunde ostasiens 151*, NOAG, Hamburg, 1993. Tr. Wolfgang Schamoni.

[14] そのほかには寒川光太郎「密猟者（*Der nordlandjäger*）」、永井荷風「おもかげ（*Geliebtes gesicht*）」、武者小路実篤の「良寛（*Ryôkan*）」がドイツ語に翻訳され収載されている。

[15] 原文: « Première femme véritablement moderne de la littérature japonaise, révoltée, lucide, passionnée ». Christian Galin, *<Préface>*, Arishima Takeo, *Les jours de Yôko*,, Philippe Picquier, Arles, 1998, p.5.　※日本語訳は執筆者による

[16] Lucia Monnin, *<Ambivalence et hystérie : la représentation de la crise identitaire de la nouvelle femme dans le roman d'Arishima Takeo, « Aru onna »>* Université de Genève, 2003

[17] *<La représentation de la condition féminine dans « Aru-onnna » d'Arishima>*（「『或る女』における新しい女性像の表出」）2005 / *<Le problème du christianisme chez Arishima>*（「有島武郎におけるキリスト教の問題」）2006

[18] 潜在的に日本、日本文学に興味、好意を持っていたために読者となった場合が多かったことは断っておかなければならない。

[19] 両書ともにフィリップ・ピキエール社より刊行されている。

[20] Cf. 芹澤光治良「「或る女」がパリで仏訳出版された時」『有島武郎全集　月報１　第４巻附録』筑摩書房１９７９／芹澤光治良「日本文学は海外でどのように読まれているか」『こころの窓・こころの旅』新潮社１９７４

[21] 芹澤光治良「「或る女」がパリで仏訳出版された時」同前, p.2.

[22] 芹澤光治良「日本文学は海外でどのようによまれているか」同前, p.242.

[23] Cf.『読売新聞』１９４３年４月７日朝刊一面、『職員録』内閣印刷局 etc.

[24] 芹澤光治良「「或る女」がパリで仏訳出版された時」同前, p.2.

[25] Cf. 八木澤善次「有島先生と草の葉会」（『有島武郎全集　月報・第六号』新潮社１９２９）有島武郎研究会編『有島武郎と場所－有島武郎研究叢書　第十集－』右文書院１９９６, pp.225-226.

[26] 大仏次郎「私の履歴書」『作家の自伝９１　大仏次郎』日本図書センター１９９９, p.46.　cf. 初出は１９６４年１２月の『日本経済新聞』の連載になる。

[27] Cf. 鶴見祐輔「有島武郎君を想ふ」（『有島武郎全集　月報・第五号』新潮社１９２９ cf.「朝日講堂に於ける記念講演会に寄せられたものである。（編者）」）有島武郎研究会編『有島武郎とキリスト教－有島武郎研究叢書　第七集－』右文書院１９９５

[28] 芹澤光治良「文芸時評（3）女婿教育の味」『報知新聞』１９３６年３月４日

[29] 松尾邦之助「海外から見た日本文学の地位」同前, p. 211.

[30] Cf.『読売新聞』１９２１年３月１０日朝刊７面

[31] 松尾邦之助「海外から見た日本文学の地位」同前, pp.211-212.

[32] Cf. 長与善郎『わが心の遍歴』筑摩書房１９５９, p.215.

[33] Cf.有島武郎「ポケット日記　一九一七【訳】」『有島武郎全集　第十二巻』筑摩書房１９８２, p.554.

[34] 松尾邦之助「海外から見た日本文学の地位」同前, p. 211.

[35] 有島武郎「或る女」『有島武郎全集　第四巻』筑摩書房１９７９, p.125.

[36] Arishima Takeorô *Cette femme-là*, Ernest Flammarion, Pairs, 1926, p.156.

[37] 安川定男「有島武郎とベルグソン」『有島武郎論』明治書院１９８７, p.311.

[38] Cf. 有島武郎「惜しみなく愛は奪ふ」『有島武郎全集　第８巻』筑摩書房１９８０　※第１４章周辺を参照の事

[39] Cf. 有島武郎「Creative Evolution 梗概」『有島武郎全集　第１５巻』筑摩書房１９８５, pp.347-362.

[40] 有島武郎「木村徳蔵宛書簡（1912.5.22 付）」『有島武郎全集　第１３巻』筑摩書房１９８４, p.253.

[41] 有島武郎「有島生馬宛書簡（1912.5.22 付）」『有島武郎全集　第１３巻』同前

[42] 谷川徹三「影響された書物」三笠書房１９３５, p.379.

[43] ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』（『ベルクソン』市川浩訳・講談社学術文庫 1991, p.323.）

[44] 新渡戸稲造「哲人ベルグソン氏」『東西相触れて』実業之日本社１９２８, p.265.

[45] 鶴見祐輔「訪れてゆくこころ　九、新渡戸先生（下）」『読売新聞』１９２３年８月６日朝刊３面　※この鶴見による文章は、当時、ジュネーブに駐在していた盟友・前田多門に捧げられている。

[46] 芹澤光治良「日本文学は海外でどのように読まれているか」同前, p.242.

[47] これに先立つ１９２５年９月の仏文の月刊誌『ヨーロッパ（*Europe*）』（F.REIDER 社）、に有島生馬が関東大震災後の在留フランス人達を扱った短編小説「別荘の隣人」（『新潮』１９２４）が浅田、ジャコブの共訳によって *Mon voisin de campagne* というタイトルで掲載され、文末にはジャコブによる簡潔な有島三兄弟（武郎・生馬・里見淳）の紹介がなされている。この作品は、フランス国立図書館の電子アーカイブ閲覧サイト Gallica において、パリ大学の紀要の１９３８年の第１号に掲載された「日本の表意文字とデッサンについての諸考察（*Considérations sur l'idéogramme et le dessin japonais*）」（タイトルに注がつけられ、この文章が１９３８年７月２６日にソルボンヌで催された講演を基にしている事が理解できる。）とともに一般に向けて無料公開されている。※日本語タイトルは執筆者による拙訳

[48] W・イーザー「作用美学理論のための予備考察」『行為としての読書』岩波書店１９８２, p.36.

※本論の執筆にあたって、２００８年末に『有島武郎研究』（有島武郎研究会）に寄稿した研究ノート「フランス語版『或る女（前編）』（１９２６）－翻訳に関する経緯とその可能性－」において、文字数の都合などにより議論の俎上に上げる事ができなかったものを、大幅に改変しながら論述、加筆するとともに、そこから浮かび上がってくる問題を総合的に整理し、一つの大きなテーゼとして提示することを主眼とした。

（すぎぶち　よういち／日本文化学）

平成21年度 修士学位論文題目について

	専攻	専門	氏名	題目
1	人文学	文化人類学・宗教学・日本思想史	杉本　一恵	スペインのユダヤ人 ー寛容と不寛容の間で揺れる人々ー
2	人文学	文化人類学・宗教学・日本思想史	猪瀬　千尋	中世音楽から見た王権の構造 ー儀礼と名器を中心にー
3	人文学	文化人類学・宗教学・日本思想史	末松　美咲	お伽草子『和泉式部』における女性と仏教
4	人文学	文化人類学・宗教学・日本思想史	卜　舒テイ	植民地台湾における皇民化運動とその影響
5	人文学	日本文化学	苅谷　桃子	井上靖『天平の甍』とその演劇化
6	人文学	日本文化学	頴永　喜和	青少年の読書環境におけるヤングアダルト・サービスの展開
7	人文学	日本文化学	渡邊　幸代	川端康成の作品における戦争と女性
8	人文学	日本文化学	木野　皓允	戦前期における三菱企業内教育の研究
9	人文学	日本文化学	葛川　元樹	中上健次作品における「仮母」の語りと「路地」表象 ー『風仙花』『地の果て　至上の時』『日輪の翼』を中心にー
10	人文学	日本文化学	佐藤　千尋	『源氏物語』における親と子ども
11	人文学	日本文化学	張　麗娴	1987年以降の叙述トリック研究
12	人文学	日本文化学	陳　念洪	現代日中二字漢語の対照研究 ー漢字「愛」を含む二字漢語を対象にー
13	人文学	哲学	小川　晃範	フッサール現象学におけるヒューム哲学の受容
14	人文学	哲学	橋本　哲	ウィトゲンシュタインの後期哲学における心的述語批判について
15	人文学	西洋古典学	健谷　喜久子	ルクレティウスの幸福と歴史観
16	人文学	西洋古典学	福岡　のりこ	セネカ『トロイアの女たち』についての考察 ー魂の不滅と消滅をめぐってー
17	人文学	西洋古典学	大橋　哲	プルデンティウス『プシュコマキア』における美徳と悪徳の戦闘描写について
18	人文学	言語学	朴　賢雨	感情形容詞に関する考察
19	人文学	言語学	陳　カイ之	中国語の動詞接尾辞「了」の意味分析と「た」の対照研究
20	人文学	言語学	BERSABAL Celestine	使役的な形態を中心とするタガログ語の動詞接辞
21	人文学	言語学	増田　祥代	イタリア語の非人称受動文について
22	人文学	言語学	山田　千晶	助詞の省略とゼロ助詞の機能について
23	人文学	言語学	劉　佳	現代中国語の「　zhe」についての解釈
24	人文学	言語学	劉　詰	日本語受身文の機能的分析から見る中国語「被構文」
25	人文学	中国文学	田中　孝恵	柳宗元の九篇の傳
26	人文学	中国文学	花村　昭紀	英雄児女小説の物語構造の特徴
27	人文学	中国文学	金　明蘭	市河寛斎の臨游受容 ー田園詩を中心にー
28	人文学	日本史学	服部　光真	甲賀郡中惣の成立と戦国期地域社会
29	人文学	日本史学	伊藤　光雅	六位以下官人について　天皇との人格的関係
30	人文学	日本史学	加藤　沙波	戦後日本の「戦犯」問題
31	人文学	日本史学	苅谷　菜々子	白山信仰と神仏分離
32	人文学	日本史学	木村　慎平	近代都市における屎尿問題と地域社会
33	人文学	日本史学	段　汝乾	日唐中央官僚制度の貴族制的要素について
34	人文学	日本史学	朴　勝夏	『交隣提醒』から見える雨森芳洲の対朝鮮意識

	専攻	専門	氏名	題目
35	人文学	日本史学	廣田　真理子	鳥取東照宮別当寺淳光院における住職継目と院室号附与
36	人文学	日本史学	山田　裕輝	幕末期長州藩の政治的動向と「航海遠略策」
37	人文学	西洋史学	本間　陽子	前４世紀末のオロポスとアテネ ーアンフィアライオン聖域の発展を中心としてー
38	人文学	西洋史学	福井　亜起	前四世紀ギリシアにおける連邦国家の形成と政治理念の変遷
39	人文学	西洋史学	石黒　英行	１９世紀ニューヨーク州におけるブラックフェイス・ミンストレル ー新聞デジタル史料による分析ー
40	人文学	西洋史学	井上　陽子	フィリップ・オーギュスト治世初期における王領地と王国統治
41	人文学	西洋史学	平田　早紀	プトレマイオス朝エジプトにおけるユダヤ人共同体
42	人文学	美学美術史学	百合草　真理子	イザベッラ・デステのストゥディオーロにおけるコレッジョ作《美徳の寓意》と《悪徳の寓意》
43	人文学	美学美術史学	上原　永子	ガンダーラの菩薩像の装身具にあらわれた非仏教意匠 ー太陽神像の象徴的機能性を中心にー
44	人文学	美学美術史学	塩津　青夏	バーネット・ニューマン作《ステーションズ・オヴ・ザ・クロス》に関する考察
45	人文学	美学美術史学	吉田　映子	ピエール・ボナールのデッサンと作品生成 ー後期風景画を中心にー
46	人文学	考古学	市川　彰	メソアメリカ南東部社会の考古学的研究 ー先古典期後期から古典期前期にかけてー
47	人文学	考古学	川崎　志乃	伊勢地域における弥生時代社会の研究
48	人文学	考古学	斎藤　弘之	縄文時代晩期における歯牙変形と社会関係
49	人文学	日本文学	李　明喜	「温泉文学」としての『雪国』と雑誌『温泉』 ー川端文学における「温泉場」という装置ー
50	人文学	日本文学	蒙　娟	芭蕉俳文に対する中国逸話の影響の研究
51	人文学	日本文学	横山　知恵	延慶本『平家物語』における女人往生と救済
52	人文学	日本語学	杉本　雅子	高等学校における「二重尊敬」の教授法と文学作品の実相
53	人文学	日本語学	阿部　裕	古代日本語における動詞連接の研究
54	人文学	日本語学	李　在鏞	１８世紀日本における外国語音の仮名表記法 ー『全一道人』の「ツ」表記をめぐってー
55	人文学	日本語学	郭　一穎	二格名詞句と数量詞遊離の関係について
56	人文学	日本語学	河辺　友美	古代日本語における動詞語尾フについて
57	人文学	日本語学	張　培	現代語ダケにおける程度・限度・とりたての用法について
58	人文学	英米文学	三原　大地	Envisioning Knowledge:Maps, Microscopes, and Tristram Shandy
59	人文学	フランス文学	藤本　なつみ	トクヴィルとフランス革命幻想
60	人文学	ドイツ文学	清　泰恵	ヘルマン・ヘッセの『シッダールタ』における主人公の人間的成長 ー彼の遍歴における愛の考察ー
61	人文学	英語学	谷掛　慶太	A Synchronic and Diachronic Study of the That-Trace Effect in English
62	人文学	英語学	本多　尚子	A Diachronic Study of the Get-Passive
63	人文学	英語学	吉村　悠希	A Synchronic and Diachronic Study of Subject Contact Clauses in English